



Title	大学発の災害ボランティア活動の記録 : 新潟県中越地震におけるfromHUSの活動
Author(s)	諏訪, 晃一; 渥美, 公秀
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2006, 32, p. 231-251
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/5456">https://doi.org/10.18910/5456</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大学発の災害ボランティア活動の記録  
——新潟県中越地震における fromHUS の活動——

諏訪 晃 一  
渥 美 公 秀

目 次

1. はじめに
2. fromHUS の活動の経緯
3. fromHUS の活動の特徴と意義



## 大学発の災害ボランティア活動の記録 —新潟県中越地震における fromHUS の活動<sup>(1)</sup>—

諏訪 晃一<sup>(2)</sup>・渥美 公秀<sup>(3)</sup>

### 1. はじめに

2004年10月23日の午後6時前、新潟県中部において地震が発生した。翌日、「平成16年(2004年)新潟県中越地震」と命名されたこの地震(及びその余震)は、48名の死者を出すなど、甚大な被害をもたらした。筆者らは、発災直後より情報収集に努め、中長期的な観点から被災地支援を行ってきた。より具体的には、筆者(渥美)は、発災翌日に現地入りして以降、何度も被災地を訪れる中で、中長期的な支援のあり方を模索してきた。また、筆者(諏訪)は、発災直後から、被災地支援に関する情報収集<sup>(1)</sup>や、メーリングリスト(後述)の管理・運営といった、後方支援を主に担当した。

震災から約ひと月を経た11月29日、筆者らの呼びかけによって、被災地支援に何らかの関わりを持つ関係者によるメーリングリストが作られた。程なく、このメーリングリストはfromHUS<sup>(2)</sup>と呼ばれるようになり、また、このメーリングリストの参加者らも、fromHUS(というグループ)と呼ばれるようになる。以来、fromHUSのメンバーは、このメーリングリストなどを活用しながら、この震災を機に設立された「KOBEから応援する会<sup>(3)</sup>」の事務所を主な拠点とし、継続的に被災地支援の活動を行ってきた。

---

(1) このたびの fromHUS の活動にあたっては、UCC 上島珈琲株式会社様並びに従業員有志の皆様、株式会社アンリ・シャルバンティエ様、特定非営利活動法人ひまわりの夢企画様、猪名川町立白金小学校6年生(当時)の皆様、大阪大学大学院人間科学研究科の先生方、同ボランティア人間科学講座の有志の方々よりご寄付を頂戴いたしました。KOBEから応援する会、及び特定非営利活動法人日本災害救援ボランティアネットワーク(NVNAD)を通じてご支援いただいた方々も含めまして、ご支援いただいた多くの皆様方に、fromHUS のメンバーとして、記して感謝申し上げます。

(2) 大阪大学大学院人間科学研究科(ボランティア人間科学講座 地域共生論研究分野 博士後期課程)

(3) 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター、大阪大学大学院人間科学研究科(ボランティア人間科学講座 地域共生論研究分野)

ところで、こうした学生による災害の被災地支援の活動は、明治時代からすでに行われており<sup>4)</sup>、とりわけ阪神・淡路大震災(以下、阪神大震災)の発災以降は、取り立てて珍しいものではなくなっている<sup>5)</sup>。しかし、こういった活動の記録は、活動そのものの広がりには比べれば、圧倒的に少ない。また、記録がある場合も、一般での入手が困難な形態で発行されていることが多い<sup>6)</sup>。筆者(渥美)も阪神大震災以来、災害NPOや災害ボランティアについて、参与観察に基づく研究を続けてきているが(e.g., 渥美, 2001)、その中では、学生の動きについてはほとんど記述してこなかった。

そこで本稿では、fromHUSに参加した学生・院生・教員をはじめとする関係者による、発災以来、本稿執筆時点(2005年9月末)までの、1年弱にわたる活動を綴り、記録とすることとした。記述にあたっては、fromHUSが第一義的にはメーリングリストの名称であることを鑑み、メーリングリストによって配信されたメールやその添付ファイルとして送付された、各学生からの活動報告などに基づいた。なお、本稿は活動を記録し、報告することを第一の目的とした。理論的な考察については別稿に譲り、本稿では理論的な論点を抽出し、整理するにとどめた。

## 2. fromHUSの活動の経緯

### 2.1 発災からfromHUSの成立まで

2004年10月23日の夕刻、新潟県中部において地震が発生したという第一報が、京都市内にいた筆者らのもとに届けられた。NVNADでは、当日午後9時すぎの段階で、翌日午前に現地入りすることを決定、翌日、筆者(渥美)は、NVNADの理事長と共に、NVNADの一員であることも兼ねて現地へ赴き、長岡市災害ボランティアセンターの立ち上げに協力するなどの支援活動を行った。また、筆者(諏訪)は、被災地に関する情報収集をはじめとする後方支援を行った。現地入りしたことによる状況把握を踏まえて、筆者(渥美)は、NVNADからの参加呼びかけという形で学生のボランティアを募った。その結果、11月5日から9日にかけて、学生(3名)・NVNADの元職員(T氏)及び筆者(渥美)が現地に赴き、現地で活動する他の災害NPOを通じての情報収集の他、長岡市災害ボランティアセンターを通じて、個人宅の片付け、避難所での夜間ボランティアなどの活動を行った。なお、この時点で、NVNADは、長岡市災害ボランティアセンターの「山古志班」(通称)とのつながりを深めており<sup>7)</sup>、情報収集も山古志村に関するものに重点を置いていた<sup>8)</sup>。

11月11日、前々日までに現地入りした学生・NVNADの元職員及び筆者ら(諏訪・

渥美) によって会合 (5 名が参加) が持たれた。この時点で、人間科学部から被災地へ赴く学生ボランティアが話題に上っており、fromHUS の成立への流れが見られる。また、「『阪神が復興している姿が何よりも励みになる』という言葉をもって、行ってよかったと感じた。阪神からの発信、ということが自分たちが思う以上に大事なのかもしれない。」という声が聞かれた。その後の KOBE から応援する会との連携につながる動きである。

ただ、この時点では、参加した者同士で情報交換をすることはあっても、現地に行っていない者への発信は、まだ不十分であった。そこで、筆者らが所属するボランティア人間科学講座を主な対象として呼びかけを行い、11月29日に報告会を兼ねたミーティングを行うことになった<sup>9)</sup>。この時点での呼びかけとなった背景として、KOBE から応援する会の事務所の開設に目処が立ち、現地での物理的・組織的な拠点の確保に目処が立ったこと、NVNAD が一定額の支援金を集めており、学生の活動への資金的なバックアップが可能となりつつあったこと等が挙げられる。

報告会では、11月上旬に筆者 (渥美) とともに現地入りした学生らと、それとは別の動きとして独自に現地入りした学生から、現地での活動と今後の見通しについての報告がなされた。そして、この会合の最後に、筆者 (諏訪) が、せっかく中越に関心がある人が集まったのだから、今後もつながりを持つために、メーリングリストでも作ってはどうか、という提起を行ったのが fromHUS の始まりである。

## 2.2 fromHUS の成立から 2004 年末まで

### fromHUS 成立：メーリングリストを介したつながりの始まり

メーリングリストとしての fromHUS は、会合が行われた当日(11月29日)に立ち上げられ、教員・学生・院生・卒業生など、人間科学部に関連のある人が主にメンバーとして名を連ねた(当初は 18 名)<sup>10)</sup>。

fromHUS の成立以降、学生の現地入りへの動きが加速されたが、その動きは必ずしもスムーズではなかった。NVNAD より、往復交通費の一部補助<sup>11)</sup>、宿泊場所の提供<sup>12)</sup>、活動費補助<sup>13)</sup>などが行われるという通知があり、これに応じて現地を訪問する、という学生が何名か現れた。一方で、当初の予定では、この時点で現地をすでに訪問していた学生からの報告をメーリングリストで共有する、という方向性が確認されていたが、実際には進まなかった。そこで、12月6日に、もう一度会合を持つことになった。これが fromHUS としての実質的に初めての会合となる。

この日の話し合いの中では、交通手段、宿泊場所、持ち物など、現地へ行って活動す

の上でのごく基本的な情報の確認がかなりの割合を占めた。しかし一方では、KOBEから応援する会の事務所(以下、「拠点」<sup>14)</sup>)を、ちょっと立ち寄ってお茶でも飲めるような場にしてはどうか、といったことも話し合われた。実際、この後のfromHUSのメンバーは、この「拠点」を、被災した人が気軽に訪れて一息つける場にしていくための活動に、継続的に関わっていくことになる。

#### fromHUSとしての初めての現地入り：「拠点」での活動の開始<sup>15)</sup>

12月10日から14日にかけて<sup>16)</sup>、4人の学生が現地入りし、主に長岡市ボランティアセンターを通じて活動を行った<sup>17)</sup>。この時期の被災地では、避難所から仮設住宅への引っ越しが行われていたが、荷物の量に比べてボランティアの数が多く、どちらかという手持ちぶさたになる場面が多かったようである。例えば、「全体的に活動よりも、仕事を探したり待機する時間の方が長かったです。」([fromhus] [00068] 2004年12月12日)<sup>18)</sup>という報告が聞かれた。こういった状況の下でも、学生たちが次につながる一定の活動を展開することができたのは、先に現地入りし、現地の人々と幅広いネットワークを築いていた元NVNAD職員のコーディネーションによるところが大きい。

また、学生たちは、開設まもないKOBEから応援する会の「拠点」でも活動を行った。この「拠点」は、長岡駅から徒歩圏内<sup>19)</sup>にあり、長岡市が設置した「操車場北」「操車場南」と呼ばれる応急仮設住宅<sup>20)</sup>にもほど近い(図1)。ただし、KOBEから応援する会やその「拠点」の存在は、まだ「操車場北」「操車場南」に住む人々には、あまり知られておらず、学生の活動も、「拠点」で救援物資<sup>21)</sup>を整理・配布する他は、チラシ作り<sup>22)</sup>やチラシの戸別配布が活動の中心を占めていた。

現地に行った者からの報告は、後から現地入りするメンバーに現地の状況を伝えるという意味でも、支援をしてくださる方への報告の元になる情報としても、貴重なものであり、活動を継続的なものにする上で重要である。そ



図1 「KOBEから応援する会」事務所周辺図

ここで、筆者（諏訪）は、大学院生らに対し、メーリングリストに送られてきた学部生からの報告に対してメーリングリスト上で積極的に返信するように、ということのを要請した<sup>23)</sup>。結果としてこの働きかけは成功し、事務連絡以外のやりとりがメーリングリスト上でも徐々に増えていった。

### 「拠点」の充実

このころ、「拠点」では、居場所としての充実に向けた整備が進められていた。具体的には、「事務所内に被災された方々がお茶を飲んでくつろいでいただけるサロンのようなスペースを設けて、被災された方々が気軽にお越しいただき、ほっと安らいでいけるような場」(fromHUS・NVNAD, 2005, p.4)の提供を試みた。これによって、「独居の方々や、コミュニティーに入れていない方が、阪神・淡路大震災の時の様に孤独死や自殺に向かわないようにサポートする」(fromHUS・NVNAD, 2005, p.4)ことや、ボランティアと被災地の人々が「お茶を飲みながら話をする事で、日常的な会話の中からニーズを聞き出す」(fromHUS・NVNAD, 2005, p.5)ということが目指された。

こうした目標の実現のために、看板作成や部屋の飾り付け・模様替え、といったことその他、有力な手段として考えられたのが、喫茶の提供であった。必要な物資については、「KOBE から」ということと絡めつつ、NVNAD から神戸に本社を置くコーヒー関連企業に提供を依頼したところ、快諾をいただき、実現の運びとなった。このコーヒーの影響力には大変大きなものがあった。例えば、次のような報告があった。

コーヒーの香りが人を呼び寄せるようで、仮設の方、隣室のスクールの方、ビル清掃会社の方などいろんな方が集まって来ました。温かい部屋の中で、皆でコーヒーを飲みながら、わいわいがやがやおしゃべりを楽しみました。以前と比べて皆さんの笑顔が格段に増え、柔らかくなっておりますし、滞在時間（雑時する時間）がずっと長くなっています。「コーヒーのみに毎日来るよ」と言って下さる方もたくさんいました。（[fromhus][00188] 2004年12月28日）

### 新しいプロジェクト

このほか、この時期には次の3つの新しいプロジェクトが企画・実施された。まず、「お茶碗プロジェクト」は、特定非営利活動法人である「ひまわりの夢企画」の協力のもと、12月19日から年末にかけて行われたもので、被災した人々に食器を提供するものである。震災では、食器が割れたり、自宅から取り出せなくなったりする一方、食器は毎日の食事に関わるものであるだけに、その面での支援は重要である。fromHUSのメンバーは、「ひまわりの夢企画」への協力要請や、段ボール箱50箱分もの食器の整理、広報などを行った。

「ルミナリエ企画」は、NVNAD への大口の匿名寄付 をきっかけに、12 月 20 日に行われたもので、被災地の人々を神戸ルミナリエへのバスツアーに招待しようという企画である。fromHUS のメンバーは、現地では参加の呼びかけを行い、神戸では参加者の案内係として活動した<sup>24)</sup>。

「お菓子プロジェクト」は、2 回生らの提唱により、12 月 29 日に行われたもので、「拠点」で手作りのお菓子を提供するというものである。「お菓子プロジェクト」に限らず、これらのプロジェクトは、1 日限りのものであっても、当然、その前後に準備の期間がある。このほか、この時期には、阪神大震災の被災地にある、猪名川町立白金小学校の 6 年生から、手紙が手編みのマフラーとともに提供されるなど、外部からの支援にも広がりが見られた。

### 活動の担い手

こういった活動の展開を現地の「拠点」で下支えたのは、KOBE から応援する会の構成団体である、特定非営利活動法人ハートネットふくしまの関係者と、12 月 19 日から翌年 1 月 5 日まで、20 日間に渡って現地に滞在した fromHUS の学生 (3 回生 S さん) の存在である。救援物資の整理や大阪との連絡調整、「拠点」の空間としての整備、仮設住宅の訪問、「拠点」の来訪者への対応など、KOBE から応援する会の活動のほぼすべての場面に関与していた。中でも、「拠点」への来訪者とお茶を飲みながら話をするのは、一見、無駄な時間を過ごしているように見えるが、実は KOBE から応援する会のその時点での目標に照らして、最も重要な役回りであった。また、この 20 日間に現地へ行った fromHUS のメンバーは、この 3 回生から現地でそれまでの活動の経過などについて逐一説明を受けており、この 3 回生の存在があったからこそ、短期間でも充実した活動を展開することができたと言えよう。

当然、この 3 回生の負担は大きかった。例えば、現地へ赴いた別のメンバーから、以下のような発言がなされるなど、現地で活動する人を大阪からどのように支えていくか、といったことが大きな課題となっていた。

S さんは家に帰っても拠点がよりよくなるようにと考えています。そういう意味では休む暇がないという感じです。誰か S さんと一緒に模索し活動していける人がいたらと思いました。(〔fromhus〕[00187] 2004 年 12 月 28 日)

## 2.3 2005 年元旦から「拠点」の一時閉鎖まで

### 年明け以後

年末年始は、たこ揚げなど、いくつかのイベントが開かれてはいたが、目立って新し

い動きはなかった。むしろ、fromHUS の内部では、現地に行った者の報告の中に、他の組織が行っているイベントへの違和感がたびたび記されるようになるにつれて、イベントではなく、被災地の人々の日常をサポートすることに重点を置くべきだ、という空気が支配的になりつつあった。とはいっても、この時期の「拠点」は、全体として人手不足であり、「拠点」そのものの維持のための人員を確保するのが精一杯、という状況で、なかなか仮設住宅を戸別に訪問するといった活動ができないでいた。また、KOBE から応援する会では、「拠点」が開設されて以来、「拠点」に滞在してその実務を支えてきた NPO の常勤スタッフから、平常時に行っていた活動への影響が無視できなくなっている、という主旨の声が挙がっていた。

こうした背景から、KOBE から応援する会のメンバーから、fromHUS のメンバーに対して、「拠点」のシフト表が示され、空いているところを埋めてほしい、という要請がなされるようになった。このように、仮設住宅に住む人々にとって、「拠点」がなじみのある存在として定着しつつある一方で、KOBE から応援する会は、新たな活動に向けての一区切りが必要な時期であった。一方で、fromHUS では、年末の三つのプロジェクトに引き続き、NVNAD のカレンダー市<sup>29)</sup>に協力するなど、継続的に活動を行っていた。

#### ランチタイムミーティング、第一回報告会、1月17日

これと前後して、fromHUS では、メールのやりとりだけではなく、一堂に会して話をする機会を設けるようになる。後に「ランチタイムミーティング」と呼ばれるようになるこの会合は、現地へ行った学生(3回生 S さん)からの提案で、毎週水曜日の昼休み(午後0時頃から午後1時頃まで)に行われることとなった<sup>29)</sup>。出欠確認などは特には行わず、出席できるメンバーが主席して、そのときに必要な内容について話し合う、という場である。第1回目は報告会の直前、1月12日に行われた。

こうした状況の中、1月13日に、大阪大学人間科学部にて fromHUS として初めての報告会が開かれ、途中で出入りはあったものの、最終的には21名が参加した。この第1回報告会では、KOBE から応援する会が主に支援を行っていた「操車場北」「操車場南」の仮設住宅の状況の他、団体としての KOBE から応援する会の概要やグループとしての fromHUS の概要についての説明を行った上で、現地で活動したメンバー(2回生・3回生など計7名)から報告があった。この日の会においては、報告だけでなく、今後の方針を話し合う場としても設定されていたので、午後6時から始まった報告会全体が終了したのは午後9時半であったが、最後まで残って議論に参加する者が少なくなかった。

2005年1月17日、阪神・淡路大震災から10年目のこの日、KOBEから応援する会の「拠点」は、一時的に閉鎖されていた。「KOBEから」を謳う以上は、阪神大震災から10年目という節目を、それにふさわしい(とされる)形で迎える必要があり、きちんと時期を区切って閉鎖する方がよい、という判断がなされたのである<sup>27)</sup>。一方、fromHUSとしては、KOBEから応援する会と密接な関係を持ってはいたものの、阪神大震災と結びつけた活動は、行われなかった<sup>28)</sup>。

#### 2.4 「拠点」の再開から第2回報告会まで

「拠点」が閉鎖されている間、fromHUSの活動はやや低調になったものの、再開に伴って、再び活気を取り戻した。このころのfromHUSでは、複数のプロジェクトが実現に向けて動いていた。

##### 空間としての「拠点」を充実させるためのプロジェクト

こうしたプロジェクトのうち、ここで取り上げる2つは、空間としての「拠点」の充実させることをねらいとしていた。年末から提案されていた、「拠点」に絵本を置くプロジェクトでは、1月14日から、絵本に限らず本を集め、2月25日に現地に本を郵送した。この本は、「拠点」内の読書スペースの本棚に置かれ、気に入ったものについては持ち帰って構わない、とされた。実際、本棚の本は、徐々に減っていき、決して多くはないものの、一定のニーズがあったことが示された。

また、年初に提案された「なくてもいいけどあったらいいなプロジェクト」と題された企画は、生活必需品ではないものの、生活にちょっとした潤いを与えてくれるだろうと思われるものを、大阪で集めて「拠点」に送ろう、という企画である。物を介した支援に否定的な意見がないではなかったが、被災地での日常の生活をちょっとよくする仕掛けとして、息長く取り組まれたものである。

##### 単発のプロジェクト

一方、拠点が再開されてからは、バレンタインデー(2月14日)に絡めた活動ができないか、といったことが話題に上っていた。単発の取り組みではあるが、「単なる一度きりのイベントに終わらないように、お菓子はあくまでもツールとし、仮設を一軒一軒訪問して被災者の方との交流を持ち、fromHUSの存在をより多くの方に知っていただくこと」(fromHUS・NVNAD, 2005, p.VIII)を目的としていた。もちろん、KOBEから応援する会及び「拠点」の存在を知ってもらうことも重要な目的であった。

この企画では、当初は、年末の「お菓子プロジェクト」と同じく、大阪で作って現地へ持ち込むことを計画していた。しかし、全ての家庭に行き渡るだけの量をどのように

して作るか、ということと、それに伴って、衛生面での問題も無視できない、という課題が浮上し、外部からの支援を要請することになった。

様々な可能性を探った末に、コーヒーの場合と同じく、「KOBE から」ということで、関係者を通じて 阪神間に本拠を置く洋菓子製造業者に依頼したところ、まとまった寄付を頂くことができた。「拠点」に届いた洋菓子を小分けし、手作りのカードや、前述のコーヒー関連企業の社員有志からいただいたコーヒー<sup>29)</sup>をセットにして、各戸にお渡しした。これとは別に、「お菓子プロジェクト」の際と同じく、「拠点」には手作りのお菓子を置いて来訪者に提供した。

### 地域に根ざす

このころの「拠点」では、ようやく仮設住宅に住む人々をはじめとする被災地の人々に、KOBE から応援する会(ないしはその「拠点」)になじみがでてきた、ということが話題になっていた。例えば、次のような報告があった。

拠点には結構人が来られています。仮設内でも KOBE の黄色いカップ (ポンチョ) さえ着ていれば、挨拶してもらえるほど知られています。チョコを配るのにもなかなかいい条件になっていると思います。また、拠点に頻繁におしゃべりに来たり、ボランティアが親しくなった方の仮設に上がってお話を聞かせてもらったり、ご飯をいただいたりということも出て来ています。私が以前いた時には見られなかったことです。([fromhus] [00418] 2005 年 2 月 10 日)

また、あるご夫婦は、fromHUS のメンバーが現地入りするのに合わせて、いつもシュークリームを買って待っていてくださった。さらに、KOBE から応援する会で活動するボランティアの中に、地元住民からの参加が定着しつつあった。そうした地元のボランティアと顔なじみになることで、「拠点」に親しみが増すというケースもあった。

これは、それまで継続的に行われてきた「拠点」を居心地のよい場所にしよう、という努力の積み上げと無縁ではないだろう。例えば、このころ「拠点」を初めて訪れた fromHUS のメンバー自身からの、「私自身、想像以上に拠点が雰囲気がよく居心地のいいことに驚きました。」([fromhus] [00422] 2005 年 2 月 12 日) といった感想や、「何人もの方が仰っていますが、事務所の雰囲気はとても穏やかで落ち着きます。」([fromhus] [00428] 2005 年 2 月 15 日)という報告があった。

しかし、たとえただ単にお茶を飲むだけのスペースでも、その維持には、コストと人手が必要である。例えば、次のような声が聞かれた。

KOBE に人がたくさん来てくれるのは嬉しいです。しかし、お迎えできるスタッ

フが少ない中では、くつろぎスペースとしての質を維持できるラインを感じておくのも大事かと思いました。3日間いた中で、自分ひとりでお茶を飲むのではなく、スタッフとお茶を飲みながら話をするを求めて来訪する方が何人かありました。そういう方を大切にできる場所であつたらいいなと思います。([fromhus] [00428] 2005年2月15日)

また、fromHUSのメンバーは短期間(数日単位)で入れ替わり立ち替わり訪れる形を取った。こうした活動のスタイルは、現地に長期的に駐在したKOBEから応援する会のスタッフの存在や、地元のボランティアの定着があつてこそ実現したものとも言える。

一方で、KOBEから応援する会の関係者からも、仮設住宅内での人間関係や、その中で生じている誤解<sup>30)</sup>が少しは分かるようになってきつつあつた。こうした仮設住宅の状況を踏まえて、どのような支援を継続していけばいいのか、ということが模索されたのもこの時期である。例えば、次のような声があつた。

コミュニティがしっかりしていればいるほど、その中でのしごらみなども大きくなり、窮屈な思いをする場合があるということに気付きました。その場合の受け皿というか、息抜き場所でありたいと思いました。そのためにも、拠点に来るか来ないかを決めるのはもちろん仮設に住んでいる方たちで、その選択ができるような状態に、まずはなつてほしいと思います。([fromhus] [00449] 2005年2月20日)

### 中長期的なプロジェクト

さらに、それまでの活動の中で、「KOBEから」という言葉が当初の予想以上に、被災地の人々に訴えかける力を持っている、ということが分かりつつあつたので、中期的な課題として、阪神大震災の被災地の人々と、中越の被災地の人々をどう結びつけていくか、といったことが議論されていた。

また、2月13日に毎日新聞(大阪本社版)に、2月18日に新潟日報に、事前に取材を受けていた記事が掲載され、KOBEから応援する会の活動がより広く知られるようになった<sup>31)</sup>。実際に、こうした記事を見て、「拠点」を訪れるようになった現地の人も少なくない。fromHUSの中でも、自分たちの活動が広く注目を集めていることが話題になった。これに伴って、fromHUSの活動や、メンバーが接している仮設住宅の状況を、メディアにどう発信していくか、ということも議論になった。

他大学との連携が話題になったのも、このころである。具体的には、地元長岡の国立大学と、東京の私立大学である<sup>32)</sup>。しかし、これらの連携は、個人レベルでのつながりに留まり、fromHUS全体として、他大学と連携して活動することはできなかった。

## 活動の転機

この時期の fromHUS の活動は、一定の成果を上げ、おおむね順調に推移してはいたが、その次の展開を考えたとき、課題は少なくなかった。それは、fromHUS が深く関わってきた KOBE から応援する会もほぼ同様であった。

例えば、fromHUS で活動していたメンバーは、それまでは3回生が中心であったが、2月末頃になると就職活動などが本格化することもあり、活動の第一線から徐々に退かざるを得なくなってきた。そこで、自ずと2回生に注目が集まったが、2回生としても、3回生が活動できなくなるから、という理由だけで自分たちが事実上の引き継ぎを求められることには違和感がある、という声があった。そこで、3月2日のランチタイムミーティングでは、そもそも今後も支援は必要だと思うかどうか、といった点も含めて、2回生を中心に、その場にいた10名が、それぞれの思いを語る場が設けられた。その結果、何らかの形での支援の継続は必要である、ということは確認されたものの、それを誰がどの程度担うのか、ということについては結論が出なかった。

また、「拠点」についても、予定では4月末で当初の契約期間が終了することが、このころ問題として浮上していた。契約期間を延長するにしても、資金的な問題をどうクリアするか、ということが課題になっていた。

「拠点」の契約期間の問題とは別に、資金的な面については、fromHUS として独自に寄付金を集める、ということも模索された。しかし、学内で貴重な支援をいただくことはできたものの、中長期的に活動を支えるほどの規模の寄付は、結局得られなかった。この時期の KOBE から応援する会の活動は、かなりの部分を fromHUS のメンバーが担っており、欠くことのできない存在となっていたので、fromHUS の転機は、そのまま KOBE から応援する会の転機と結びついていた。

結局、この状況を一気に打開したのは、KOBE から応援する会とは別に活動を行っていた、災害 NPO である SeRV(真如苑救援ボランティア)からの大口の寄付と、活動メンバーの派遣であった。結果的に、これを機に、「拠点」の維持をはじめとする、それまで fromHUS のメンバーが主に関わってきた活動のかなりの部分が、この新たな支援へと引き継がれていった。

## 第2回報告会

こうした問題ははらみつつも(むしろこうした問題を広く知っていただき、さらなる支援をお願いするという目的も含めて)、第2回の報告会を持とう、ということが2月の中旬あたりから話題になり始めた。候補日が入学試験に重なるなど、調整は必ずしもスムーズではなかったが、結局、3月8日に行われることとなった。

報告会では、第1回報告会までの流れと、fromHUS や KOBE から応援する会の概要が説明された後、13人のメンバーから、時系列でそれぞれの活動報告が行われた。その後、報告会第二部という位置づけで、今後の活動の方向性についての議論が行われた。この場においては、支援をいただいたコーヒー関連企業の社員も参加するなど、fromHUSのメンバー以外からも意見が述べられた。

議論の中では、仮設住宅ないしは被災地の状況を考えた場合、何らかの支援の継続が必要であるという意見が大勢を占めた。しかし、どのような支援が必要なのかということや、その支援の中で、fromHUS が担うべき部分はこういったことなのか、ということについては、それぞれが確信を持っていない状況ではなかった。

## 2.5 「拠点」の閉鎖と「KOBE から応援する会」報告会、それ以後

前述の大口の人的・資金的支援によって、fromHUSの間では、ある種の義務感から解放されたことを歓迎する声も出ていた。そして、「拠点の維持」という大きな目標がなくなって以降、fromHUSの活動は徐々に縮小に向かう。ただし、被災地では、雪融けとともに、被害を受けた家屋の中の片付けなどの作業が本格化しつつあった。そこで、これ以後は、散発的ではあったが、春休みや5月の連休などを利用して、家屋内の片付けなどに絡めつつ現地を訪れるなどの活動が行われた。

そうした中で、KOBE から応援する会の事務所ほど近い場所に、「中越復興市民会議<sup>33)</sup>」が事務所を構えることになった。それに対して、KOBE から応援する会も、「拠点」を閉鎖して、中越復興市民会議の事務所内に移転することとなり、一つの区切りを迎えた。

第2回報告会以後の fromHUS 全体としての活動は、KOBE から応援する会の活動報告会での発表と、活動報告書の作成であった。KOBE から応援する会の構成団体である NVNAD の主な支援先の一つ<sup>34)</sup>として、fromHUS にも活動報告会への参加の要請があり、fromHUS としての20分の発表を行った。報告会は、NVNAD が事務局となって、6月5日に神戸市内で開催された<sup>35)</sup>。一方、活動報告書は、あくまで KOBE から応援する会の活動を報告するものであるが、その中には fromHUS のセクションが設けられている。また、監修者は NVNAD、編集者は fromHUS と NVNAD、発刊者が NVNAD となっており、刊行に当たって fromHUS が役割の一端を担ったことが分かる。

これ以後、fromHUS では、グループとしてではなく、関心のある個人がそれぞれに被災地に関わるというスタイルに移行しつつある<sup>36)</sup>。もともと fromHUS は関心のある個人をつなげるためのメーリングリストの名称なので、このことは fromHUS が元の姿

に戻っただけ、と解することもできる。

発災から1年を迎えようとするいま、被災地は、未だ復興への入口にたどり着いたかどうか、という段階である。例えば、家屋に関して言えば、今年は雪が降るまでに倒壊した家屋を撤去して更地にすることが目標で、再建は雪が融けてから、といったところが少なくない。しかし、このことは必ずしも否定的に捉える必要はない。被災地内では復興に向けての長い期間を有効に使った取り組みが、すでに進められているし、被災地外からは、そうした状況に合わせた、息の長い支援が求められるということに過ぎない。fromHUSのメンバーにできることは、少なくないだろう。

### 3. fromHUS の活動の特徴と意義

#### fromHUS の活動の特徴

ここで、fromHUS の活動の特徴と意義について、理論的な論点を抽出すべく、まとめておこう。fromHUS の活動の第一の特徴は、その活動時期と場所が、従来報告されている災害時の学生ボランティアとは異なるということである。fromHUS の活動は、阪神大震災の学生ボランティアについて多く報告されているような、緊急期の活動(特に避難所での活動)ではなく、避難所が徐々に閉鎖されていった後の時期に、仮設住宅に住む人々を主に念頭に置きながら行われた活動である。この活動の時期と対象の違いが、まずは fromHUS の活動の特徴と言えよう。さらに、こうした活動を、被災地から離れた場所(日帰りで行くことが難しい場所)から行ったという点も、一個人の活動を超えた範囲の活動としては、比較的希少であると考えられる<sup>37)</sup>。理論的な観点としては、遠くから、わざわざ費用と労力をかけて現地へ赴くことの意義について、より深い考察が必要であろう。

第二の特徴として、こうした活動が、KOBE から応援する会及びその構成団体である NVNAD という、災害 NPO との連携によって行われたということが挙げられる。NVNAD からの資金補助と、KOBE から応援する会の「拠点」という物理的な資源があったことが、fromHUS の活動を支える大きな背景になっていた。理論的な観点としては、組織としての NPO とボランティア個々人に開ける世界の間をどう接続していくのかという点を指摘できる。

#### 被災地支援における fromHUS の活動の意義

こうした fromHUS の活動の意義は、第一義的には、被災地において「ほっと安らい

でいけるような場」(fromHUS・NVNAD, 2005, p.4) を作りあげたことに尽きる。そうした場が実現していたことは、次のようなメンバーの現地報告から例証可能であろう。

今日下着を取りに来られた方にお茶（お寿司屋さんの大きいお湯のみで）をお出ししたところ、「こんなおっきいお湯のみでお茶飲むの久しぶり。おいしいお茶だねえ」と大変喜んでいただきました。（[fromhus][00110]2004年12月18日）

お茶わんがなく、今まで交代でご飯を食べたり、割り箸を洗って繰り返し使ったりしていたというお話も聞き、切なくなりました。

（[fromhus][00136]2004年12月21日）

一見街並みも普通で子ども達も元気なのに、会話の節々には「母の形見もつぶれてねえ」などという言葉が自然と入ってきます。

（[fromhus][00422]2005年2月12日）

こうした現地報告の中にかいま見える、被災した人々の言葉は、外部参加者が、例えば「被災して困ったことはありませんか？」と尋ねたところで、決して返ってくるものではない。あるいは、ただ単に「おっきいお湯のみ」や「お茶わん」といった物資があるだけでは、決して聞かれないはずである。

つまり、こうした言葉は、fromHUS がその活動を通じて、KOBE から応援する会の「拠点」の物理的な環境を整備し、被災地の人々との関係を築くことがあって初めて聞かれたものであり、被災地に住むそれぞれの人が fromHUS のメンバーと共に紡ぎ出した言葉である。KOBE から応援する会が目指した「ほっと安らいでいけるような場」とは、まさにこうした言葉を紡ぎ出す（ことができる）場に他ならない。fromHUS の活動の意義は、人間関係も含めた意味での、こうした場の提供にあったと言えよう。

一方、中長期的な被災地支援、という観点から考えても、こうした「ほっと安らいでいけるような場」の提供は意義深い。災害救援では、緊急期を過ぎると、とたんに被災した人々のニーズが個別化するとともに、外部参加者には見えづらくなる。この段階において、ニーズはその場に静的なものとして存在するわけではなく、外部参加者と被災地の人々が共に言葉を紡いでいく中で、初めて立ち現れる。つまり、「困ったことはありませんか？」と尋ねるのではなく、被災地の人々との何気ない会話の中で現れる、ふとした言葉に耳を傾ける他はない。「拠点」はまさにこうしたことが可能になる場であり、そのために fromHUS が果たした役割は決して小さくない。ここでは、「ニーズ」なるものの構築過程や、それを可能にする「場」とは何か、といったことが理論的な切

り口として挙げられよう。

### 学生の学びにおける fromHUS の活動の意義

fromHUS での活動は、個々のメンバー自身にも大きな影響を及ぼしたと考えられる。本稿で取り上げた fromHUS のメンバーの報告は、全て学生 (大学院生を含む) 自身によるものであり、学生たちがこうした事象を記述するスキルと感性を身につけていったことがうかがえる。現地滞在を踏まえての報告は (資金補助を行った NVNAD への報告を除いては)、義務づけられていたわけではなく、書式にも量にも規定はなかったが、一つの報告で 5,000 字以上に上るものもあった。メーリングリスト上でやりとりされたこれらの文字を仮に全て印刷すれば、A4 用紙で数百枚に相当することからも、その量が想像できよう。

ただし、被災地支援活動のただ中であって、こうした記述を行うことは決して容易ではないし、現地へ赴いた者からすれば、書けなかったことや書かれていないことにこそ、被災地支援のリアリティがある、といっても過言ではない。また、論理的に考えれば、被災地で支援を受ける (とされる) 人々の側から、こうしたボランティア活動の記録が綴られてもおかしくはない。ここで、ボランティア活動を記録し、報告するという事そのものに潜む問題<sup>38)</sup>や、そうした記述から、エスノグラフィーを綴っていくことに関する、理論的な課題の存在を指摘できる。

また、KOBE から応援する会の報告会での fromHUS の発表は、NVNAD のニューズレター (第 60 号) に「ボランティアがとても奥深いものだということを実感させられたという感想もありました。」と写真入りで報告されるなど、おおむね好評であったと考えられる。また、fromHUS は KOBE から応援する会の活動報告書の編集にあたった。こうした場を通じて、学生たちが、それぞれのスキルと感性を磨いていったことは想像に難くない。さらに、被災地支援の域から一步踏み出て、卒業論文などを視野に入れ、学生としての勉学と直接結びつける動きもある。理論的には、こうした学生個人がそれぞれの場で学び、身につける事柄と、大学の正規の教育課程の中での学びの間の整理、あるいは、サービスマーケティングといった概念との整理が必要であると思われる。

### 注

- 1) 災害救援においては、被災状況についての情報は確かに重要であるが、被災地支援にあたって必要な情報はそれに留まらない。例えば、緊急時に現地入りする際には、行き帰りの航空便に空席があるかどうか、といった、被災とは直接関係ない情報も支援活動を大きく左右する。また、中長期的な支援を考える場合、現地の地誌に早くから通じておく

ことも重要である。もちろん、こうした情報収集は、日本災害救援ボランティアネットワーク (NVNAD) の関係者をはじめとする多くの人々と協働で行ったことであり、筆者だけが行っていただけではない。

- 2) 慣例では「フロムヒュース」と読む。
- 3) 慣例では「こうべからおうえんするかい」と読む。NVNAD と特定非営利活動法人ハートネットふくしまが中心となって設立した被災地支援の団体である、「中越地震被災者支援実行委員会」の中の、具体的な活動主体の一つである。KOBE から応援する会では、長岡市内で事務所を借り上げ、活動の拠点としていたほか、ボランティアの宿泊場所としても使用していた。なお、KOBE は必ずしも神戸市を意味するものではなく、阪神・淡路大震災の被災地や被災地の人々、さらには被災地支援を行った人々全体を表象するものとして位置づけられている。
- 4) 例えば、広瀬 (2003) によれば、明治 24 年 (1891 年) の濃尾地震の被災地支援活動において、すでに学生による活動が見られたという。ただし、この時点においては、高等教育に関する法制度が必ずしも十分ではなく、何をもち「大学生による活動」と見なすかは、見解が分かれると思われる。一方、大正 12 年 (1923 年) の関東大震災では、東京帝国大学の学生が活動したとされ (鈴木・菅・渥美, 2003)、遅くともこの時点においては、大学生による被災地支援活動があったと言えよう。
- 5) 例えば、関西学院大学 (荒川・野口, 1996)、東北学院大学 (赤塚・塩村, 1996) などの活動が報告されている。
- 6) 現状では、こうした資料を一括して収集・保存するシステムが存在しないため、後世の者が活動の記録を参照するのは容易ではない。神戸大学附属図書館の「震災文庫」は、貴重な取り組みではあるものの、残念ながら、例外的な存在であると言わざるを得ないのが実状である。
- 7) その後、NVNAD は支援の重点を長岡市内で被災した人に移していくが、この山古志班のリーダー (当時) との関係は、その後も継続して続いており、NVNAD の被災地支援を語る上では欠くことのできないキーパーソンとなっている。
- 8) 山古志村は、被災に伴って 10 月 25 日に全村に避難指示を出し、村民の多くは隣の長岡市に避難してきていた。
- 9) 参加の呼びかけは、11 月 22 日、筆者 (渥美) によって、ボランティア人間科学講座のメーリングリストを通じてなされた。
- 10) ただし、fromHUS という名称が定着するのはこれよりかなり後のことである。
- 11) 往復の交通費について、15,000 円を上限に実費精算を行うというもの。
- 12) KOBE から応援する会事務所内の一角を宿泊場所として提供するというもので、当初は寝袋持参が原則であった。これに伴い、いつとき、寝袋の調達が話題になった。
- 13) 車中泊を除き、一泊につき 1,000 円の資金補助を行うというもの。
- 14) KOBE から応援する会の事務所の通称。事務所は、単に「KOBE (こうべ)」と呼ばれることもあった。
- 15) 今回の活動に関する傷害保険及び賠償保険については、全国社会福祉協議会が各損害保険会社と団体契約を行っている「ボランティア活動保険」に、各個人で加入することとした。実際には、長岡市災害ボランティアセンターで加入申込をする者が多かった。
- 16) この 4 日間に限らず、fromHUS のメンバー (学生) が、授業期間中に活動するにあつ

ては、授業の履修に大きな支障が出ないように十分配慮するよう求めた。

- 17) fromHUS では、メンバーがまとまって現地入りすることにはあまり重きを置かず、それぞれの都合に合わせて活動日を設定することとしていた。この4人についても、活動日は必ずしも重なっていない。活動日がばらつくことの不便さがないではなかったが、「拠点」の維持にあたっては、むしろこのことが積極的な意味を持つ場面もあった。
- 18) 以下、メーリングリストからの引用であることをこのような形式で示すこととする。fromHUS が使用していたシステムでは、投稿用アドレスに送信されたメールは、題名の部分に自動的に通し番号が付けられた上で配信された。例えば、[fromhus] [00068] は fromHUS のメーリングリストに流れた 68 番目のメールであることを意味する (番号の前の [fromhus] は全て小文字)。また、番号の直後の日付はメールが送信された日のものである。以下では、メールの本文に加えてその添付ファイルも含めて一つのメールとみなすこととする。また、引用文中の個人名は、必要に応じて伏せることとした。引用部分の改行箇所は、原文とは異なる。
- 19) 当時の住所は「長岡市千歳3丁目5-17 センザイビル1F」であり、長岡駅の西側の出口から約1kmの位置にある。KOBE から応援する会の独自の事務所であった。
- 20) 「操車場南」仮設には、主に長岡市内の太田地区(蓬平町・濁沢町・竹之高地町)と呼ばれる地域の人々がまとまって入居していた(12月8日時点で203世帯が入居)。太田地区は、山間地であり、山古志村の北側に隣接する地域であったが、報道が山古志村に集中した一方、「操車場南」仮設には、外部からのボランティアがあまり関わりを持っていなかった。それに対して、「操車場北」仮設は、各地の仮設住宅に地区別で入れなかった人たちが入居しており、支援に関わる者の間で「雑居」と呼ばれることがあった(12月8日時点で196世帯が入居)。なお、世帯数は長岡市発行の『市政だより』2005年1月号による(一世帯が二戸以上の仮設住宅に分かれて入居する場合があるので、世帯数と戸数は一致しない)。
- 21) 2004年夏の水害の際に、中之島町(2005年4月1日をもって長岡市と合併)に集まった救援物資のうち、余ったものなどを、ハートネットふくしまが一時的に保管していた。メーカーから直接届けられた衣類(特に下着)が中心であった。
- 22) ルミナリエツァーに関するもの。これについては後述。
- 23) 当時、fromHUS の中では、「現地を訪れる学部生」と「大阪に残る大学院生・卒業生」という構図ができていた。
- 24) この企画は、神戸での様子が、読売・朝日・毎日・産経・日経各紙の大阪本社版、及び神戸新聞に、全紙写真付で掲載されるなど、メディアの反応は大きかった。
- 25) 年末年始に各家庭や事業所から、使わないカレンダーを寄付していただき、バザーとして販売する催し。2005年の場合は、約100万円の収益を上げ、収益の一部が新潟県中越地震の被災地支援に用いられた。
- 26) これに先だって、1月10日には、fromHUS としての初めての単独での宴席である新年会が行われた。
- 27) 閉鎖されていたのは1月16日から25日までの10日間である。
- 28) これに限らず、fromHUS では、新潟県中越地震以外の災害への関心は、必ずしも高まらなかった。2004年12月26日に発生したインド洋津波災害や、2005年3月20日に発生した福岡西方沖地震も、fromHUS の中では大きな話題にはならなかった。

- 29) インスタントコーヒーとカップなどがセットになった商品。
- 30) 具体的には、仮設住宅在住の人で、KOBE から応援する会の物資を仮設住宅内で(特に外に出歩くのが困難な人に)配る活動をしていた人を指して、「あの人はお金をもらって活動している」という主旨の噂が漏れ伝わってきていた。この噂の内容は事実ではない。
- 31) どちらも、KOBE から応援する会に対する取材であったが、ボランティアの声として掲載されたのは、fromHUS のメンバーのものであった。
- 32) fromHUS のメンバーがその活動の中で出会った他大学の学生の所属は、長岡技術科学大学、長岡造形大学、大妻女子大学、大正大学、東北福祉大学、東洋大学、福島大学、明治学院大学などが主であった。
- 33) 地元で復興に向けて活動していた市民らを中心に設立された民間・非営利の任意団体。
- 34) KOBE から応援する会の旅費交通費補助は総額が1,613,317 円であり、大半が fromHUS のメンバーに対して支出された。
- 35) 報告会には 34 人の参加があり、複数の報道機関からの取材があった。また、「中越復興市民会議」の事務局長がゲストとして招かれ、現地の状況の報告がなされた。なお、開催が決定されたのは、これに先立つ 5 月上旬のことであった。
- 36) このほか、中越復興市民会議を通じての依頼で、山古志村で被災した人々の手書きの手記をテキストファイル化する作業を fromHUS のメンバーが担当した。
- 37) このほか、今回参加した学生たちは、医療や看護、福祉といった分野、つまり、職業の一環として災害救援に関わる分野を専攻している学生ではなかったことも、指摘しておいてよい点であろう。
- 38) 実際、1 月頃、NVNAD への報告を巡って、NVNAD のスタッフと現地へ行った fromHUS のメンバーとの間の認識のずれが顕在化し、メーリングリスト上で厳しいやりとりがなされた。

#### 引用文献

- 赤塚俊治・塩村公子 1996 学生ボランティアの組織化を通じて学んだもの: 阪神大震災ボランティア活動の経験より ソーシャルワーク研究, 22(3), 195-201.
- 荒川義子・野口啓示 1996 震災とボランティア: 関西学院大学のボランティア活動を通してみた若者像 青少年問題研究, 45, 1-14.
- 渥美公秀 2001 ボランティアの知: 実践としてのボランティア研究 大阪大学出版会
- fromHUS・特定非営利活動法人日本災害救援ボランティアネットワーク(編) 2005 新潟県中越地震被災地支援活動報告書 特定非営利活動法人日本災害救援ボランティアネットワーク
- 広瀬満和 2004 濃尾地震と草創期の日本プロテスタント教会: 災害救援とその宣教論的意義をめぐって 関西学院大学大学院神学研究科修士論文 (未公開)
- 鈴木勇・菅磨志保・渥美公秀 2003 日本における災害ボランティアの動向: 阪神・淡路大震を契機として 実験社会心理学研究, 42(2), 166-186.

## A record of university-launched volunteer activities in disaster : Activities of "fromHUS" in the Mid Niigata Prefecture Earthquake

Koichi SUWA and Tomohide ATSUMI

The Mid Niigata prefecture Earthquake in October 23, 2004, caused serious damage including 48 casualties. Since just after the quake, both of the authors have promoted volunteering during times of disaster based on mid-and-long term perspectives. The second author has visited the disaster area frequently and the first author launched and managed a mailing list, which is named "fromHUS" and includes faculty and students of Osaka University as its members. The group, which consisted of members of the mailing list, was also called "fromHUS" after several weeks of the start.

The activity of "fromHUS" is characterized by four points. First, the activity by the members offered continuous support for residents of provisional houses rather than emergency relief for evacuees in shelters. Second, the members traveled to the disaster area from distances of over 400km. Third, most of the activity was conducted under the support of NVNAD (Nippon Volunteer Network Active in Disaster), a nonprofit organization active in disaster. Fourth, the members could almost exclusively use a home office, the office of a consortium of nonprofit organizations including NVNAD.

The significance of the activity was also examined. It is that the construction of places, in which the residents of temporary houses can stay with feeling of comfort and relief and without a state of tension and apprehension.

This article is a record of the activity, which is promoted by the members of the faculty and students. Therefore, some points of theoretical implication were presented but not thoroughly examined.